



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

謝罪と罪悪感の 認知発達心理学

田村綾菜

子どもたちが、「ごめんね」ということばに対していとも簡単に「いいよ」と答える、ある種パターン化されたやりとりをよく目にします。そんなとき、「ごめんね」ということばは、子どもにとってみれば、唱えるだけですべて解決する素敵な呪文のようなものなのかと感じます。

一方で、「ごめで済んだら警察いらん」と言って絶対にそのことばを受け入れない子どもや、周りから責められて謝るように強く促されても頑なに「ごめんね」を言わない子どもの姿を目にするこ

ともあります。このときは、まるで、「ごめんね」ということばは、受け入れたり、口にしたりしたら最後、この世が終わってしまう不吉な呪文であるかのようです。

子どもにとって「ごめんね」ということばはどのような意味を持っているのだろうか。本書はこの素朴な疑問をきっかけに始まった著者の拙い研究をまとめたものです。これから博士論文を書こうという方へ、謝罪というテーマに関心はなくても、こういうのもありか、と勇気づけられる本になっていると思います。



著 田村綾菜
発行 ナカニシヤ出版
A5判 / 107頁
定価 本体 4,600円＋税
発行年月 2013年3月

たむら あやな
昭和女子大学人間社会学部心理学助教。専門は発達心理学。著書はほかに、『感情科学』（分担執筆、京都大学学術出版会）、論文は「児童の謝罪認知に及ぼす加害者の言葉と表情の影響」（教育心理学研究、57、13-23）など。

日常生活と認知行動

認知心理学演習 応用・実践編

池田まさみ

本書は心理学を専攻する学部生を対象とした演習形式の参考書である。認知心理学の知識整理だけでなく、社会的応用・実践をリエゾンする研究事例の紹介に加え、各章末に「学習の手引き」を付し、独習時にも自ら考え、理解を振り返る機会を設けた。

実は本書は、2010年度にお茶の水女子大学で行われた一般公開講座『人間行動の科学』の講義を編集させていただいたものである。世界的に活躍されている先生方（北崎充晃氏、仲真紀子氏、藤崎和香氏、渡邊克巳氏、和田有史

氏）にご講義だけでなく、ご執筆いただけたことを本当に嬉しく思う。

また本書の基礎・理論編として、『視覚と記憶』（薬師神・甲村著）『思考と言語』も出版されている。課題やホームワークの他に、研究法が付されており、本書と併せて活用いただければ幸いです。

常々、講義であっても、学生と双方向に思考のやりとりができるような演習形式のテキストが欲しいと願っていた。本書がテキストとして、そして読者にとって、人間行動を「考える」「研究する」一助となってくれれば何よりである。



監修 石口彰
編著 池田まさみ
発行 オーム社
A5版 / 210頁
定価 本体 2,800円＋税
発行年月 2012年2月

いけだ まさみ
十文字学園女子大学人間生活学部人間発達心理学科教授。専門は認知心理学、実験心理学、発達教育学。著書はほかに、『認知心理学演習 言語と思考基礎・理論編Ⅱ』（編著、オーム社）、『子ども期の養育環境とQOL』（分担執筆、金子書房）など。



著 内田由紀子・竹村幸祐
発行 創森社
A5判 / 184頁
定価 本体 1,800円＋税
発行年月 2012年11月

うちだ ゆきこ
京都大学こころの未来研究センター准教授。専門は社会心理学、文化心理学。著書はほかに、『「ひきこもり」考』（共編、創元社）など。
たけむら こうすけ
京都大学経営管理大学院助教。専門は社会心理学、文化心理学。著書はほかに、『パーソナリティ心理学概論』（分担執筆、ナカニシヤ出版）など。

農をつなぐ仕事

普及指導員とコミュニティへの社会心理学的アプローチ

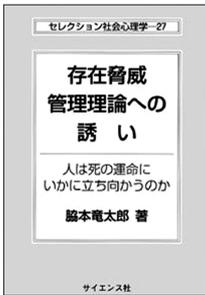
内田由紀子・竹村幸祐

他者との「つながり」は、社会における資本（ソーシャル・キャピタル：SC）として、幅広い注目を集めている。我々は農村において「技術指導と関係構築」のプロとして働く普及指導員の役割に注目し、社会心理学の観点から分析を行った。コミュニティにおけるSCはどのようにして作られ、どのような効果を持つのか？この問いに、本書は「農」を軸にした視点から挑んでいる。

四千名をこえる普及指導員を対象にした調査からわかったことは、人と人を「つなぐ」活動の重

要性とその効果である。農家同士、あるいは農家と関連機関との連携を図る仕事は、農村での生活の質を向上させていた。また、普及員が持つ他の組織とのつながり（橋渡し型SC）や、普及員が所属する部署内の良好なつながり（結束型SC）など、彼ら自身のつながりが、担当する地域内のつながりに連鎖的に拡張することも示された。

普及指導員や農政局の方々によるコラムは、データに基づく考察に息吹を与えてくれた。今後も、つながりに関わる心の働きに対する普遍的な問いに迫っていきたい。



著 脇本竜太郎
発行 サイエンス社
四六判 / 224頁
定価 本体 1,600円＋税
発行年月 2012年9月

わきもと りゅうたろう
明治大学情報コミュニケーション学部専任講師。専門は社会心理学。著書はほかに、『自己と対人関係の社会心理学』（分担執筆、北大路書房）、『社会心理学：社会で生きる人のいとなみを探る』（分担執筆、ミネルヴァ書房）、『社会心理学事典』（分担執筆、丸善）など。

存在脅威管理理論への誘い

人は死の運命にいかに向かうのか

脇本竜太郎

社会的行動の諸理論は自尊感情への動機を仮定するという共通点を持つ一方で、相互連絡に乏しい点が批判されていました。存在脅威管理理論はこの批判に応え、自尊感情の機能という点から諸理論を橋渡しします。その機能とは、存在論的恐怖（死の不可避性の認識から生じる恐怖）を緩衝する機能です。当該理論は、人が自尊感情とその基盤である文化的世界観に執心するのは、上記の緩衝機能を必要とするためだと主張します。そして、存在論的恐怖への対処という観点から、社会的行動の

統合的説明を試みています。

本書は当該理論の入門書です。前半4章では理論の背景、基本仮説、自尊感情と文化的世界観による対処、そこに関わる認知過程についてまとめました。後半4章では身体性、関係性、存在論的恐怖の否定的影響を克服する方策など、近年注目されている課題について論じました。日本語で手軽に読める文献が今までありませんでしたので、各研究を詳しく紹介するよう心がけました。社会心理学だけでなく、隣接領域の方にも資料としてお使いいただければ幸いです。